

発言者	発言内容
事務局	資料2「行動計画の改定に係るスケジュール（案）」、資料3「愛知県環境教育等行動計画の改定概要（案）」、資料4「委員等意見の反映について」について説明。
千頭会長	改定の方向として大事な点の中で抜け落ちがないかの確認や、特に改定のポイントについて、御意見をいただきたい。
平井委員	育む力の①から⑤について、ステップアップと言っているが、順序性があるのか？
事務局	一概には言えないが、順番に並べることで取組の指針になると考えている。
平井委員	<p>順序性と言うよりは、①から⑤のすべての力が、どの世代においても大切であると思う。各発達段階において、①から⑤それぞれについて、どういことができたなら達成できるのかを示す必要があると思う。</p> <p>また、④「環境を守る行動につなげる力」がこれまでの課題から考えると一番目指したいところだと感じる。①②③がそれぞれできるからこそ行動に結びつくと思う。人が行動を起こすのは、魅力や必要性を感じる時、価値を感じる時である。何をやっていけばいいのか見通しを持つことができた時に行動を起こせると思う。また、行動することによって何が変わったのか成果を自覚できた時に、さらなる行動につながると思う。そういう意味での段階があるという考え方を新行動計画に取り入れていく必要があると思う。</p>
千頭会長	「何とかする力」が学校の現場ではよく使われていたりするが、「5つの育む力」について、特に学校関係の委員から意見を伺いたい。
大鹿委員	<p>「5つの育む力」については、『トビリシ宣言』（トビリシ会議（1977年））がベースとなっていると感じ、それは良いことであると思う。ただ、育む力の表現の仕方はもっと工夫できる。例えばESDでは、「知る」→「気づく」→「行動する」という分かりやすいパターンがある。新行動計画も、県民が小難しいと思うものではなく、分かりやすくイメージしやすいものだと良いと思う。</p> <p>また、平井委員の言うように、5つの育む力の順番についてはあまり意味がないと思う。ただ、④が最終目標であることは示した方が良いと思う。</p>

発言者	発言内容
服部委員	<p>佐屋高校では、農業科と家庭科があり、実践的なことを行っている。</p> <p>ただ、県立高校一般でいうと、小中学校と比べ、実際に授業の中で環境教育を行うことは難しい。意識して環境教育について研究している学校でないと、どうしても受験や就職という目標があり、環境教育を行う余裕がない。教科としては、「理科」「社会」「家庭科」や、実業系の高校であれば「農業」「水産」などが環境教育に関して先進的な取組ができる科目であると思う。さらに H29 年 3 月の学習指導要領の改定で、「総合的な学習の時間」が「総合的な探求の時間」となり、探究活動の課題として環境教育について取り上げることができるのではないかと思う。総合的な探求の時間で課題として取り上げることで、高校生自身に環境保全の本質や解決策を発見する力がつき、大学進学後も環境教育を推し進めるような活動ができるようになると思う。</p> <p>ただ、やはり教育委員会からのある程度の強制力がないと、小中学校ではなく、高校で環境学習について取り上げるのは難しい。そのため、ある程度強制力をもってやることを行動計画に書いてほしい。また、それを行うことで高校生にとってどのようなメリットがあるのかの記載をしてほしい。</p>
岩崎委員	<p>環境学習と固定するのではなく、学びは全部つながっていると考えている。今回の新行動計画(案)に、「家庭」という項目をいれたというのは良かった。名城大学付属高校では、教員が誘導して庄内川の保全活動をやっているが、教員の誘導ではなく、高校生が自主的に活動をしていることもある。小さな頃から家庭のなかでそういう行動様式が持てるような、それこそ環境をどう作っていくかということが大切である。そのため、小・中・高校を分断してそれぞれで環境教育をやっていくのではなく、どうやって繋げていくのかが必要である。また、環境教育という縛りのなかでやるのではなく、学びの中でどう環境教育を行うのかを考えていく方が自然に環境教育をできるのではないかと考える。</p>
荻須委員	<p>河合中学校では、ホタル保護の活動を 50 年間続けている。市内では、「河合中学校と言えばホタル」という程になっている。50 年間も活動が続く理由を考えると、学校だけではなく、地域の中に根付いた活動であるからではないかと思う。地域にしっかりと保存会の組織があり、学区にホタルが飛び交う未来の姿を求めて、継続的に皆さんが活動している。これは 5 つの育む力の⑤「みんなと力を合わせて未来を作り出す力」に当てはまると思う。また、ホタル保護の活動は、中学生たちが「やらされている」</p>

発言者	発言内容
	<p>のではなく、「自然に」しかも「一生懸命」行っている。そういう地域をこれからも作っていききたいという思いが共有されている学校であることが大きいと感じる。</p> <p>5つの育む力の段階性について、ホタル保護の活動に当てはめてみると、⑤「みんなと力を合わせて未来を作り出す力」ができているとして、①「環境の素晴らしさや大切さを実感する力」については生徒も分かっているとは思いますが、②「私たちの行動が環境に与える影響を理解する力」、③「環境問題の本質や解決策を発見する力」が分かっているからこの活動に参加しているかということと必ずしもそうではないだろう。夢をもって、こういう町にしたいんだ！という思いの渦の中で動いている。ホタル保護が何につながっているのか、例えば水の環境や、山の問題についてまでは子どもたちの目には映っていない。そういうことを今後やっていきたいと考えている。</p> <p>また、「環境首都あいち」という言葉のイメージが難しい。環境という言葉自体が、自然環境や社会環境、生活環境などという言葉が複雑に絡みあっている。「環境首都あいち」という言葉のバックグラウンドを整理していくことが大事だと思う。</p>
千頭委員	<p>世代や地域によっても、環境と聞いてイメージするものが違うかもしれない。</p>
松岡委員	<p>幼児の立場で言うと、5つの育む力のステップアップは大事だと思う。行動計画なので、具体的に行動することを目指すかと言うと、幼児教育の立場では必ずしもそうではない。幼児の段階で1番大事なのは①「環境の素晴らしさや大切さを実感する力」であり、新行動計画でも①を強調すべきだと考える。何かの行動にすぐ結びつくことはないかもしれないが、あくまでも基礎的な力や、感性、実感できる力を育てることが大切。</p> <p>今回、「家庭」を主体として入れているが、幼児がいる「家庭」のなかでは、子どもを中心に親も一緒に自然の大切さに改めて気が付き、次の行動につなげる事が大切である。幼稚園教育要領の中でも基礎的な力が大事だということが強調されており、環境学習でも、幼児教育の観点からいうと、基礎的な力①が大切であると考える。</p>
千頭会長	<p>幼児教育では、例えば学校と家庭が別々なのではなく、幼稚園と家庭がつながっている。企業の立場での御意見もお願いしたい。</p>

発言者	発言内容
百瀬委員	<p>家庭での環境教育はとても大切であると考えている。それぞれの家庭によって、子どもにどういう体験をさせるのか考え方が異なる。ユニーで行っている環境についての活動にも、親が応募しないと子どもは参加できない。そのため、環境教育を受けず、自然に親しんでいない親の世代にも、環境教育を受けられる機会が必要である。環境に関する関心や、5つの育む力を持っていない大人がいっぱいいたら、なかなか行動に進まない。</p> <p>誰もが生涯にわたって関わりのある「消費生活」の中での環境学習について話したい。例えば車で行くか、歩いて行くか、自転車で行くか、家を建てる時にはソーラーパネルを付けるのか、車を買う時にはどれを買うかなど、選択をすることがたくさんある。「COOL CHOICE」と環境省もいっているが、ヒントになるようなものがあると、選択しながら大人が日常生活の中で学んでいけると思う。</p> <p>SDG s (持続可能な開発目標)では、「誰一人として取り残さない」というテーマがあり、愛知県の行動計画の中にも誰一人として取り残さないことや、SDG s を自らの生活の中で少しずつでも行うと良いことを組み込めるといいと思う。自分の選択で地球が変わる事が分かったら、どういうことが地球環境に影響するのかが学べると思う。家庭を学びの場にするために、家庭の「あらゆる場面」で学べることや気付くことができることを愛知県の行動計画のなかに組み込めたら素晴らしいと思う。</p>
千頭会長	<p>物事を「選択する力」も大切。</p>
百瀬委員	<p>生き方を選ぶことが大切であると思う。環境問題だけではなく、持続可能な社会について少しでも関心を持ってもらえたら、選択の仕方が変わってくると思う。</p>
篠田委員	<p>今までの行動計画では、なぜ行動に移らないのかが疑問であった。車があってもなぜ走らないのかが疑問であったが、タイヤが道路についていなかったのだと思う。今回の新行動計画(案)を聞き、タイヤがきちんと道路につき、車が走る感じがしておりうれしい。</p> <p>先日子どもに関する講座を行った際に、受講対象者を「3歳から9歳の子どもがいる母親」と「65歳以上の人」と絞って行った。3歳から9歳の間に5つの育む力のうちの①「環境の素晴らしさや大切さを実感する力」を育てることが大切であると考えている。その時期に①を育てないと、その後環境に関心を持たなくなり、それが心の問題や感性の問題につながってくる。3歳から9歳の子育てに関わることが多い世代を対象を絞って講</p>

発言者	発言内容
千頭委員	<p>座を行った。子どもに関わる世代間がつながることも大切であると考えている。</p> <p>アブラゼミが桜の木にとまり、クマゼミがケヤキの木にとまり、セミにもそれぞれの種類によってくらしやすい環境がある。荻須委員の言っていたホタル保護の活動も、ホタルが暮らせる環境を守っている。環境に関する基本的な感性をつくるのが大切で、①がとても大切である。</p> <p>親の世代が自然体験をしたことがないこともある。子どもにどう伝えるのかという問題がある。</p>
岩崎委員	<p>百瀬委員や篠田委員の話にもあったように、保護者によって格差が大きい。今回の改定で「家庭」が主体として入ったことは素晴らしい。</p> <p>5つの力を段階を踏んで育てていくと知っているが、基礎の部分がうまくいっていないといけない。環境学習の分野だけではないが、子どもが理解するためには親が理解していないといけないと感じる。また、親が理解していけるような社会環境が大切だと思う。これは、環境学習以外の部分にもつながっている話で、環境学習の行動計画だけの問題ではなく、とても大きな問題であると感じる。環境学習の行動計画をつくることも大切だが、もっと大きな枠組みで何とかしないと、何ともならないような地球になってしまうと感じる。</p> <p>そのような流れの中で、愛知県が何をやったらそういうことが見えてくるのかを考える事が、ヒントになると思う。</p>
浅野委員	<p>5つの育む力の⑤「みんなと力を合わせて、未来を創り出す力」の表現をもう少し踏み込み、例えば「世界の人々と力をあわせて、未来を創り出す力」にすると良いと感じる。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」では、誰一人として取り残さず、世界中でやっていくことが掲げられており、今回の新行動計画が2030年を目指す行動計画期間になっていることに鑑み、そのような表現でもよいと思う。</p> <p>アメリカがパリ協定から離脱したとはいえ、アメリカの各自治体が環境についての取組を行っていたり、企業がパリ協定での「今世紀末の世界の平均気温上昇を2度未満に抑える」という共同声明を独自で定めたりしている。「環境首都あいち」「モノづくりのあいち」もグローバルな視点を行動計画に入れるべきと考える。</p> <p>5つの育む力④「環境を守る行動につなげる力」とあるが、行動につながっていることが大事な視点であるのならば、④の位置ではなく、⑤にし</p>

発言者	発言内容
千頭会長	<p>でも良いのではないか。</p> <p>5つの育む力①「環境の素晴らしさや大切さを実感する力」について、「知る事は感じることの半分も重要ではない」と言われているようにとても大切であり、①が入っていることをとても嬉しく思う。</p> <p>アメリカでは、国はパリ協定を脱退したが、地方自治体レベルでパリ協定に準拠することを定めているところも半分程度ある。</p> <p>企業の立場としてどのように見ているか御意見をいただきたい。</p>
橋本委員	<p>EPOC（環境パートナーシップ・CLUB）では、学校への色々な出前授業等を行っている。</p> <p>改定のポイントの「家庭」を主体としたことについて、それ自体は良いことであると思うが、今回、「県民」という主体がなくなってしまった。「家庭」となると、範囲が狭まってしまう気がする。行動計画の対象が、全ての県民であるので、当てはまらない県民が出てくるのではないかという疑問がある。また、家庭での取り組みの具体的な施策のイメージがわからない。親世代への環境教育の施策が今後必要になってくるのだろうかと思う。また、「家庭」にも色々な環境がある。まずは、「家庭」を定義することが必要ではないか。</p> <p>5つの育む力について、ステップアップではなく、すべてが必要な力であり、⑤「みんなと力を合わせて、未来を創り出す力」に到達するよう頑張るのではなく、全てをやっていくことが必要であると思う。</p>
千頭会長	<p>「家庭」を入れるのは大切だが、「行動する家庭」に変わっていけるよう、社会や学校、行政が何ができるのかが大きな課題だと思う。市町村としては家庭、家族がターゲットにもなってくると思うが、基礎自治体レベルでの御意見を伺いたい。</p>
猪子委員	<p>今回の改定では「人づくり」と、行動面での「必要な力」がキーワードになっていると感じているが、「人づくり」を環境学習に当てはめると、一定の感性を持った人間をいかに育成していくかがポイントとなるのではないかと思う。</p> <p>5つの育む「力」と書かれてあるが、感性という言葉を前面に出した場合、全て「力」ではなく「心」の作用ではないかと思う。「力」という表現では、達成度やどのような順番でやるのかが議論になりがちであり、「心」という表現にすれば、全体で一つの取組として、うまくまとめられ</p>

発言者	発言内容
古鷹委員	<p>るのではないかと思う。</p> <p>環境についての取組を次世代につなぐこと、取り組む機会を確保することは大切であり、取組事例を世の中に出すことで、あらゆる人がそういった機会を得ることができると思う。取り組む機会が増えることで、「隣の人がやっているんだから私もやらなきゃ」と思う人が増え、ただ単に教えるという作業の延長よりも、多くの人に対して一定の感性定着が図れると考える。</p> <p>環境に対しての関心の個人差がかなり大きいと感じている。ごみを分別し可能な限り減らそうとする人もいれば、関係なくごみを出す人もいる。不法投棄、ポイ捨てを気にせず行う人もいれば、自ら片付ける人や行政に連絡をしてくださる人もいるなど、かなり個人差がある。全ての世代が行動計画の対象であることは良いと感じる。</p> <p>環境教育について、東浦町でも小学校での出前講座を行っているが、子どもの反応も様々で、家庭での取組の差が見えてくるところがある。</p> <p>また、何か環境に関心をもつきっかけがあると、全体的に環境について深く考えていくことができるのではないかと思う。例えば車ではなく公共交通機関を使い二酸化炭素の排出を削減するなど、きっかけになることはいくつもあるが、そのきっかけを得ることがなかなか難しいとも感じている。</p>
千頭会長	<p>きっかけづくりが大切という意見が出た。平井委員が最初に言われた、「きっかけ」と「行動した成果が見える」という両者が、セットで必要なかもしれない。</p> <p>学校における取組について、現場では、例えば研究指定などをもって活動するとなると、書類作成が必要であったり、大変だという声も聞かれているがそこも含めて平井委員、御意見お願いしたい。</p>
平井委員	<p>学習指導要領には、それぞれの教科で指導すべき内容が示されている。環境教育という教科の時間はないが、環境教育に関わる内容は多く含まれている。新しく枠を作って環境教育を行いましょうという事ではなく、それぞれの教科の中で、環境教育がどのように位置づけられているのかを理解し取り組むことが大切であると思う。先生方はかなり多忙であるので、新たなことをするのではなく、視点を変えることが大切であることを現場に周知していくことが今後の課題だととらえている。</p>

発言者	発言内容
千頭会長	<p>ユネスコの国内委員会の web サイトでは、全ての教科について環境教育がおこなわれていることを示している。例えば、国語の教科で詩の勉強をして、その詩が自然を詠っていたら、それは立派な環境教育である。</p>
大鹿委員	<p>改定について全体をまとめて発言する。「家庭」を主体としていることについて、他の委員の皆さんも良いといていたが、資料3の裏の真ん中の表で、社会、家庭、学校が横並びになっていることに違和感がある。学校や社会では施策や取組があり、それを受ける人たちがいるが、家庭では取組が自分に返ってくるものである。例えば、中心に家庭もしくは県民があり、まわりに、社会や学校があるような図ができれば。中心が子どもだった時に、学校だけが子どもに影響を与えるわけではなく、社会が子どもに影響を与えることもある。この表の表現方法を変えたい。前回の行動計画は、文章が多くイメージ図がない。社会である企業や行政の関わりや、学校の関わりから、県民の意識、能力、資質が変わっていくことや、逆に県民に関わることで社会や学校自体が変わっていくことが、図で示せると分かりやすい。どのように動けば県民や愛知県が変わるのかを表せられたら良い。また、行動した成果が見えるといいと思う。その方法については難しいが、県民、企業、学校それぞれが、環境について意識している取組がみえるようなものをつくとよいと思う。物事を単体で進めていくのではなく色々な人と関わり合うのが今回のポイントになっていると思う。県民を中心に様々な主体が関わり合う表現の仕方について、検討してほしい。</p>
千頭会長	<p>「家庭」が大事ということではあるが、「主体」なのか、「場」なのかといったことも大切か。「家庭」における環境学習の推進について御意見お願いしたい。</p>
百瀬委員	<p>ユニーで作成したワークシートでは、SDGs の 17 項目のうち関係する目標のロゴが示してあり、家庭で皆が行っている行動が様々な環境課題に関係していることを気づかせるような作りになっている。そういうものが身近にあれば、日々の選択が、気づきの機会に満ち、選択する力が身につく、皆が環境に関心をもつ。環境教育の講座や、立派なテキストではなく、web などの情報媒体などでもよい。例えば子どもがいる家庭では、子どもが学べば親も子どもから学べるが、子どもがいない家庭も学べるようにすることで、選択する力が身につく、その選択が投票同様に未来を変えていくことにつながる。ちょっとしたことでも行動したら社会が変わることが気づ</p>

発言者	発言内容
千頭委員	<p>けるような取組を県で始められないかと思う。</p> <p>気付くチャンスが大事という話をいただいた。きっかけづくり、「家庭」は学ぶための主体であり、気づくチャンスに満ちていれば、学びのスタートになる。気付くチャンス、きっかけ作りといったキーワードが入れられると良いか。</p> <p>議論のポイントは、5つの育む力をどう位置付け、どう表現するか、家庭をどう表現するか。</p>
大鹿委員	<p>今回学習指導要領が変わったことで、今までと大きく変わったことがある。今までは教科ごとに目標が異なっていたが、全教科のフォーマットが統一された点である。資質能力について3つの柱によって整理されており、1つ目が、「知識・技能」、2つ目が「思考力・判断力・表現力」、3つ目が「学びに向かう力・人間性」である。今回、この5つの育む力を3つの柱に落とし込めば、どの教科の先生も取り組みやすくなる。</p> <p>5つの育む力の②「私たちの行動が環境に与える影響を理解する力」と④「環境を守る行動につなげる力」は1つめの柱、①「環境の素晴らしさや大切さを実感する力」と③「環境問題の本質や解決策を発見する力」は2つ目の柱のように分けてみるのはどうか。そして、3つ目の柱「学びに向かう力」を最終的なゴールとしてまとめてもらおうと学校の先生は整理がしやすいと思う。なお、2つ目の柱、「思考力・判断力・表現力」というのは一般の人にはわかりにくい表現なので、「考える力」というような表現にして、気付く力や、計画する力、発見する力も2つ目の柱に取り組むとよいと思う。</p> <p>5つの育む力の表現の仕方についての一つの提案である。ただ、順番がない形にはなる。</p>
千頭委員	<p>指導要領は個人の子どもの発達を軸にしている。地域、場、を変えていくときにどのように力を出せるのか、という観点もあり、今回の新行動計画（案）では取り組む力の中に⑤「みんなと力を合わせて、未来を創り出す力」をいれていると思うが、うまく関連付けられないか。</p>
大鹿委員	<p>現在、学校現場ではもう一つ柱になっているものがあり、それは「アクティブラーニング」（主体的、対話的で深い学び）であるが、あくまで協調し、仲間と共に気づきあげるという方針でもあるので、個人だけでということではないと思う。</p>

発言者	発言内容
菅沼委員	<p>委員の皆様の話を聞いてもう少し考えなければならないと感じた部分は、各世代ごとの育む力である。そこが資料3では抜けている。例えば幼児であれば何を中心に行うのかなど、発達段階ごとに育てる力のポイントを変えると良いのではないかと感じた。5つの育む力は全て必要ではあるが、力を育むための施策が各世代により異なると考える。</p> <p>今回、それぞれの力を育むための具体的な施策を出してはいないが、例えば家庭に対して社会、行政、学校がどのように家庭に関わるのか、社会、家庭、学校をどのように繋げていけばいいのかを表す必要があると思った。</p> <p>5つの育む力⑤「みんなと力を合わせて、未来を創り出す力」について、現在資料3に書いてある期待される主な取組の中では、連携協働の推進のための施策が記載されており、皆で力を合わせて未来を作り出していく力を表現しているものではない。今後は施策とリンクさせながら今回の協議会でいただいた課題として検討していきたい。</p> <p>ステップアップの表現の仕方については結論が出なかったが、委員の皆様のお意見を踏まえ考えていきたい。</p>
千頭会長	<p>表現の仕方は難しいが、どのような切り口だったとしても、世代をつなぐことや、地域、家庭、学校をつなぐことは大切である。また、施策を意識して今後の案をつくってほしい。</p> <p>また、教育のチャンスや、気づきのきっかけについてを行動計画のなかにうまくちりばめ、「愛知県に暮らす中で、人が育つきっかけがあることに気が付く」というような表現をできるといいと考える。</p> <p>議題については以上とする。</p>